

日本古典集成

平家物語
下

水原一校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第四七回）

平家物語 下

昭和五十六年十二月五日
昭和五十六年十一月十日

発行 印刷

校注者 水原一

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

会社 新潮社



定価二二〇〇円

千一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京03(二二六)五一一(業務)
振替 東京 四一八〇八
装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目 次

凡 例 一七

卷 第 九 二三

卷 第 十 二九

卷 第 十一 一〇九

卷 第 十二 一〇三

解 説『平家物語』の流れ 三九

付 錄

本文修正一覧・地図・図録・系図・年表・補説索引 四三一

平家物語 卷第九

第八十一句 宇治川

京・屋島迎年

今井の四郎瀬田を警固する事
仁科・高梨宇治川を警固

佐々木の四郎は暖賜なる事

佐々木・梶原生暖の論

範頼・義經京に迫る

宇治川先陣争ひ 大串の重親歩立ちの先陣の事

宇治・頬田合戦の次第

.....

第八十二句 義經院參

義經院參

義仲優女暇乞ひの事
越後の口六三七日居の事

義経延喜上

義經内裏を守護申さるる事

第八十三句 兼平

平

河原合戦

義仲都落ち

近
く
さ

卷之三

兼平最後

桶口の次郎帰洛

茅野の太郎光弘討死

機山の沙良院

通口斬られ

義仲敗亡の論

第八十四句 六箇度のいくさ

平家一の谷の城郭

備前の国下津井のいくさ

淡路福良の「ぐさ」

四庫全書

和泉の国吹飯の浦のいく

備前の国今來の城のいく

福原除日

平家諸方警固

通盛北の方と名残を惜しむ

鶴越に向かはるる事

鷺の尾案内者の事

第八十六句 熊谷・平山一二の駆

熊谷父子・平山抜駆け

熊谷名のる事

平山駆け入る事

熊谷駆け入る事

熊谷・平山同心合戦の事

第八十七句 梶原二度の駆

卷之三

可憲性論

尾章平次景高

景詩・景季同心の事

第八十八句 鶴 越

大鹿二つ落つる事

鞍置馬一匹落さるる事

義経落し給ふ事

平家の屋形炎上

能登守逃れ給事

通盛詩死

起中の前言最後

第八十九句 一 の 谷

〇〇

忠度最後
重衛生捕り
後藤兵衛後日

〇〇

師盛討死
経正・経俊・清房・清定・業盛討死

〇〇

知章最後
河越黒の沙汰
敦盛最後

〇〇

熊谷発心
熊谷牒狀
経盛返牒

〇〇

元三毛
元三毛

〇〇

第九十句 小宰相身投ぐる事

〇〇

平家海上に浮かばるる事
首実檢の事

〇〇

小宰相愁嘆
小宰相身を投ぐる事

〇〇

御乳母の女房髪剃る事
通盛大夫婦の歌の沙汰

〇〇

平家物語 卷第十

第九十一句 平家の一門首渡さるる事

一一

第九十五句 横 笛

一六

維盛屋島出でらるる事

一六

滝口 発心

一六

滝口 悲恋

一七

横笛 死去

一七

滝口高野の籠居

一七

第九十六句 高野 の 卷

一七

滝口入道対談の事

一七

維盛高野参詣

一七

延喜の帝御衣を高野に送らるる事

一七

大師帝の御返事

一七

高野の縁起

一七

第九十七句 維 盛 出 家

一七

維盛出家 重景・石葦丸出家

一七

維盛武里に遺言の事

一七

維盛粉河参詣

一七

維盛湯浅に行逢はるる事

一七

重盛熊野参詣の沙汰

一七

第九十八句 維 盛 入 水

一七

維盛熊野参詣

一七

那智籠りの僧、維盛見知り奉る事
維盛卒都婆の銘

一七

維盛入水 与三兵衛・石童丸入水
武里愁嘆

第九十九句 池の大納言関東下り

崇徳院神廟
弥平兵衛宗清述懷
頼朝と池殿と参会
維盛北の方愁嘆
新帝即位

第一百句 藤 戸

源氏室山の陣
平家兒島の陣
佐々木三郎癪踏み
佐々木三郎先陣の事
都に大嘗会行はるる事

平家物語 卷第十一

第一百句 屋 島

渡辺・福島船ぞろへ
逆櫓の論
義経四国渡り
勝浦の陣
大坂越

屋島の城落去

言葉たたかひ

網信最後

卷之三

第一百二句 扇の的

卷之三

与市扇を射る

十一

卷之六

水尾谷のいく

弓流し

牟礼・高松の

卷之三

伊勢の三郎義

卷之三

田辺の濱増源
三一編集会社

住吉錦の奏聞

蒲の冠者と九

判官・梶原口

三

卷之三

二〇

梶原船いくさ

知盛いくさ下

遠矢の沙汰

原氏の船の中

海田の船の世

呻吟錄

阿波の民部心

第一百四句 壇の浦

第百三句 謂言樞原

第一百五句 早

納

四六

先帝・二位殿御最後

四四

建礼門院捕はれ

四四

大臣殿生捕らるる事

四四

飛驒の三郎左衛門の事

三四

能登殿最後

三三

知盛入水

三三

生捕の人々

三三

第一百六句 平家一門大路渡し

二三

西国より早馬

二三

明石の浦の嘆き

二三

宝剣神鏡始末

二三

二の宮御迎へ

二三

生捕の衆都入り

二三

牛飼三郎丸の事

二二

大臣殿悲哀

二二

頼朝二位に叙せらるる事

二二

平大納言の婿義経の事

二二

女院出家

二二

第一百七句 剣の巻上

二二

天地開闢

二二

素戔鳴大蛇を斬らるる事

二二

草雞の起り

二二

熱田の起り 二三
宝剣の因縁 二七
源家二つの剣 二四
宇治の橘姫 二四
渡辺の源四郎綱鬼切る事 二四
頼光蜘蛛切り 二四
安倍の責任・宗任成敗の事 二四
為義源家相続 二四
友切の起り 二四
保元平治の乱源氏凶運 二四
頼朝・義經源家再興 二四
曾我夜討の事 二四

第一百九句 鏡の沙汰

天の岩戸の事 二八
紀伊の国日前像の起り 二八
内侍所炎上のがれ給ふ事 二九
神楽弓立の宮人 二九
二見の浦の鏡 二九
神麗の沙汰 二九
頼朝義経不快 二九

第一百十句 剣の巻下

副

大臣殿副将見参の事 二九

平家物語 卷第十一

第一百十一句 大臣殿最後

三〇五

大臣殿父子関東下向

三〇五

関東たるる事

三〇六

上人の説法

三〇八

大臣殿最後

三一〇

右衛門督最後

三一三

大臣殿父子首渡し

三一五

第一百十二句 重衡の最後

三一四

重衡南都へ渡さるる事

三一四

北の方参会

三一四

同じく離別の事

三一五

重衡処刑會議

三一六

阿弥陀供養

三一九

重衡最後

三二〇

北方出家

三二一

第一百十三句 大 地 震

三二一

九重の塔たはるる事

三二二

大臣殿関東下向 二六九
副将斬らるる事 二九〇
乳母の女房身投ぐる事 二九〇

天文の博士占ふ事 二三
文徳の御時の地震 二三
朱雀の御時の地震 三四
建礼門院吉田の住まひ 三四

第百十四句 腰 越

九郎判官伊予守になる事 源氏あまた受領の事 二三
梶原讒訴 二三
申し状 二七

第百十五句 時忠能登下り

頼朝文覚招請

義朝普提院建立の事

平家生捕流罪の事

時忠女院に暇乞ひ

時忠異名

時忠能登下り

建礼門院大原寂光院隠居

土佐房上洛 二八
堀川夜討 二一
土佐房最後 二三
三河守範頼義討手の事 二四
範頼最後 二四
義経緒方頼まるる事 二四

第百十六句 堀川夜討

第一百十七句 義經都落ち

三五

義經御下文申し請けらるる事

三五

義經都落ち

三五

同じく吉野の奥に赴かるる事 同じく奥州へ下らるる事

三五

北条時政上洛

三六

吉田大納言経房

三六

十郎藏人討手の事

三七

三郎先生討手の事

三七

第一百十八句 六 代

三五

北条六代を生捕る事

三五

斎藤五・斎藤六

三五

文覚六波羅へ参らるる事

三五

六代関東下向

三五

乞ひ請け六代

三五

六代御前大覺寺へ参らるる事

三五

六代高雄入り

三五

第一百十九句 大原御幸

三五

大原御幸

三五

寂光院のたたずまひ

三五

仏間御擾所のしつらひ

三五

法皇女院と御參会の事

三五

六道問答

三五

龍宮城の夢見

三五